

Jターン漁師の挑戦 ～新たなふるさとへ根ざすために～

東串良漁業協同組合青壮年部
部長 岡本 宗明

1. 地域の概要

私達が住む東串良町は大隅半島東岸の志布志湾奥に位置する。

眼前に広がる柏原海岸は日南海岸国定公園に指定される白砂青松の海岸線が続く県下有数の景勝地で、春には黄色いルーピングが咲き誇り、潮干狩り客で賑わう美しい海岸である。

また、大地には恵み豊かな田畑が広がるとともに、唐仁古墳群や神武天皇御船出の地として悠久の歴史を持つ町でもある。

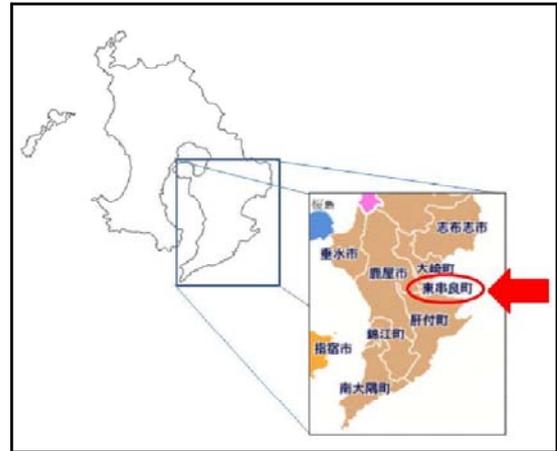


図1 東串良町の位置

2. 漁業の概要

私が所属する東串良漁業協同組合の管内は志布志湾奥部の肝属郡東串良町と曾於郡大崎町の2町にまたがっており、組合員154名（正組合員103名、准組合員51名）で構成され、機船船曳網（バッチ網）漁業や小型底曳網漁業、刺網漁業、かご漁業等が営まれている。平成24年度の東串良漁協の漁獲量は約766トン、漁獲金額は約146百万円であった（図2）。特に志布志湾は西薩海域と並んで県下有数のチリメン（しらす干し）の産地であり、機船船曳網漁業の漁獲金額は平成24年度実績で約7割を占め（図3）、東串良漁協の主力漁業となっている。

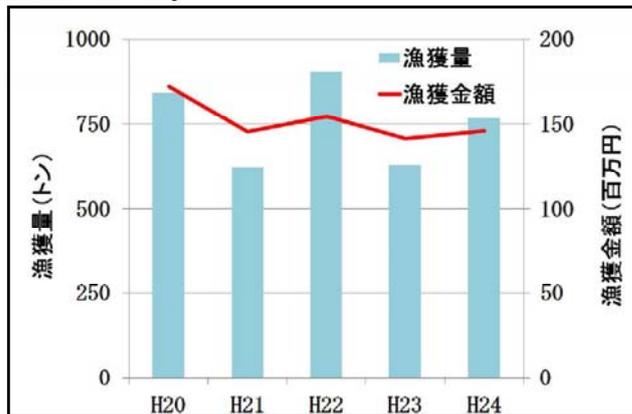


図2 年度別漁獲量・漁獲金額

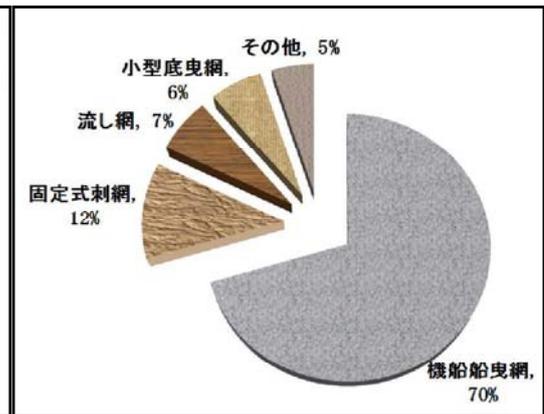


図3 H24年度の漁業種類別漁獲金額

3. 所属グループの組織と運営

私が現在部長を務めている東串良漁協青壮年部は昭和59年1月28日に設立され、38名のメンバー（平均年齢31才）でスタートした。現在メンバー数は20名で38才の私が最年少となっているが、現在も多くの設立当初メンバーの方々に青壮年部の中心メンバーとして元

気に活躍していただいている。

青壮年部の活動としては、毎年、海岸清掃やマダイ・ヒラメの放流事業、漁業体験や魚食普及、先進地視察研修を行っている。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機（漁師を目指したきっかけ）

（1）漁師を目指すまで

私は昭和50年愛知県で生まれ、高校を卒業するまで神奈川県厚木市で育った。もともと小さい頃から船や魚釣りが好きで鹿児島大学水産学部へ進学したものの、大学卒業後は薩摩川内市（旧：入来町）で農業に就業して自然卵養鶏や路地野菜の生産に携わった。しかしその後就職先の農園が閉鎖となってしまい、アルバイト生活を送るようになった。

（2）「ザ・漁師塾」への参加

そんなある日、友人が新聞に掲載されていた鹿児島県主催の漁業就業相談フェア「ザ・漁師塾」（図4）の新聞切り抜きを持参してきた。

もともと釣りが好きだった私は興味を惹かれ、とりあえず平成15年度の「ザ・漁師塾」に参加してみることにした。「ザ・漁師塾」は阿久根市で開催され、短期研修では1本釣りや旋網などに参加し、「漁師はおもしろい」と実感し、その時28才だった私は本格的に漁師になりたいと考えるようになった。

（3）「ザ・漁師塾」を経て種子島へ

「ザ・漁師塾」を受講して漁師になりたいと考えた私は、受講後に長期研修制度を受けたいと県に相談した。将来の独立も見据えて一本釣り漁業に従事したいと希望したところ、種子島の南種子町漁協に受け入れ先があるとのことで種子島で漁師生活をスタートさせることとなった。



図4 ザ・漁師塾パンフレット

5. 研究・実践活動の状況及び成果（いざ漁師となって）

（1）種子島での漁師生活

種子島には平成16年1月に引っ越し、3ヶ月間の長期研修がスタートしたが、研修中は船酔いもせず漁業へのやりがいを実感でき、研修終了後もそのまま研修先の親方の所で就業することとなった（図5）。

種子島では4月のもじゃこ漁に始まり、アオダイやハマダイ、メダイ等の瀬物一本釣りに従事し、南種子町を起点に遠くはトカラ列島まで漁に出た。また、種子島の温暖な気候と人々の暖かい人情に触れ、鹿児島にいた頃に知り合った妻とも結婚して楽しい漁師生活を送る日々が続いた。しかし一方で家庭を持ったことで家計は苦しくなっていた。



図5 種子島でお世話になった親方

そんな種子島生活が3年目となったある日、妻の知人から、東串良町で漁業を営んでい

た家族の漁船を譲りたいとの話が舞い込んできた。漁船の他に刺網と小型底曳網の漁具も併せて安価で譲りたいという話はとても魅力的であり、また妻の妊娠・出産も後押しとなって、妻の故郷である東串良町へ移住することを決意した。

(2) 新天地・東串良での漁師生活の模索

東串良町へ移住した平成18年の夏、漁業者として生活するにあたり、まずは東串良漁協へ行き漁協の参事に東串良で漁業を営みたいと相談した。参事からはとりあえずは地元の漁業者のもとで刺網の研修を受けて刺網漁業からスタートし、ゆくゆくは小型底曳網漁業に従事するのが良いのではないかと提案を受け、まずは先輩漁業者の元で1ヶ月間刺網の研修を受けることとなった(図6)。



図6 東串良の刺網の師匠と

その後1ヶ月の研修を終えて東串良漁協の准組合員となり、いよいよ本格的に東串良での漁師生活がスタートした。

(3) マゴチ刺網との出会い

東串良での漁業をスタートさせた頃は、流し網や固定式刺網などの刺網漁に取り組んだ。その他、県の水産業普及指導員に相談し、加世田漁協や指宿漁協の指導漁業士のもとで刺網漁についても勉強させてもらうなど、県内各地の漁業士の方々にも大変お世話になった。

そして、かつて私が農業に従事していた頃に知り合った川内市漁協の漁業者のもとでマゴチ刺網と出会うこととなった。マゴチ刺網はかつて西薩地区で盛んに行われていたが、近年では漁獲量がかなり少なくなってきたとの話だった。一方で東串良ではマゴチ刺網を専門的に行う人はいないものの、岸寄りの刺網にちょくちょくマゴチが掛かってくる状況であった。それを聞いた川内市漁協の漁業者から「マゴチの資源がかなりあるのではないか。」と言われ、4～6月の産卵期に水深30～40m付近で試しに刺網を



図7 刺網にかかったマゴチ

張ってみようアドバイスを受け、持ち合わせのサワラ用の刺網を張ってみるとマゴチをまとめて漁獲することができた。そこでマゴチ刺網の道具を本格的に揃え、平成20年からこれまで志布志湾海域では本格的に行われていなかったマゴチ刺網を開始した(図7)。

その後マゴチ刺網は周囲の漁業者にも波及し、これからもマゴチ刺網を永続的に操業できるよう、水産業普及指導員から取り寄せた他海域におけるマゴチ資源管理計画などの資料を参考にしながら、業者会にて目合いや網の長さの制限を設けるなど、漁獲ルールの策定にも取り組んだ。

また、個人的な取組として500g未満の小型魚の再放流も行っている。その他、平成20年以降のマゴチ刺網の漁獲量や漁獲尾数、漁獲金額等のデータをパソコンで管理し、各年の漁獲動向について自分なりの分析も行っている。

今後も自分のライフワークとしてマゴチ刺網のデータを蓄積し続け、漁獲努力量に対す

る漁獲尾数を基準に志布志湾におけるマゴチの資源動向を知る目安にしたり，適正な漁獲管理のあり方を模索していきたいと考えている（図8）。

	操業日数(日)	漁獲量(kg)	漁獲尾数(匹)	漁獲高(¥)	kg/日	匹/日	¥/日	平均単価(¥/kg)	平均体重(g)	hkm	匹/hkm
2008	43	19,049	2,296	1,898,534	44.3	53.4	39,501	891.7	829.7	190.20	4.76
2009	43	19,469	2,377	1,840,736	45.3	55.3	38,157	842.7	819.1	271.92	4.11
2010	26	13,445	1,469	969,828	51.7	56.5	37,293	721.2	915.2	248.50	5.90
2011	14	3,526	412	326,005	25.2	29.4	23,286	924.6	855.8	95.73	4.30
2012	22	10,090	1,120	880,340	45.8	51.0	30,015	655.1	897.8	200.90	6.03
2013	26	11,436	1,247	747,927	40.8	44.5	26,712	654.0	917.1	292.88	4.13

*'06, '09年において、漁獲尾数、匹/日、平均体重は推定値。hkm、匹/hkmは参考値（データの信頼性が他年次にくらべ低い）。
 *hkm:総網入れ時間×総網長さ(その年の漁獲努力量にあたる)
 *匹/hkm:その年に単位努力量あたり何匹のマゴチを漁獲できたか

図8 エクセルでの漁獲動向の分析

(4) 小型底曳網漁業の開始

かつては志布志湾における花形漁業で最盛期には30以上の経営体が年間500トン以上の水揚げを誇っていた小型底曳網も，近年では経営体数は最盛期の半分以下となり，年間漁獲量も200トンを割り込む状態になっている（図9）。それでも小型底曳網の漁獲金額に魅力を感じていた私はいずれは操業したいと強く願っていた。

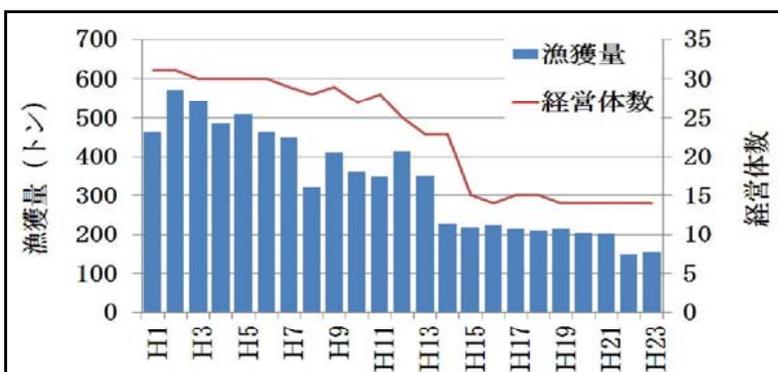


図9 志布志湾海域での小型底曳網の年間漁獲量と経営体数の推移

そして東串良に来てから3年が経過してようやく念願の漁業許可を取得した。最初はまず東串良漁協の先輩漁業者に一緒に乗船してもらい，操業について指導していただいた。また，隣の志布志漁協で小型底曳網を営んでいる指導漁業士のもとで，乗船研修させてもらうとともに網の構造等について詳しくレクチャーしていただいた。

また，当初は手探りの状態で広いエリアを曳いて回っていたが，次第に漁場の特性を把握できるようになり，一晩かけて共同漁業権内の水深20～30mエリアを海岸と平行に2往復曳くスタイルに落ち着いた。

その他，身網と袋網が簡単に脱着ができるようにして操業中の破損時に船上でスペアと取り替えられるようにしたり，安価な雑魚の混獲を減らし船上での選別作業が楽になるよう身網の目合いを大きくしたり，袋網を獲りたい魚種に応じて目合いのものに変えるなど，漁具の改良にも取り組んだ（図10）。このように周囲の先輩漁業者に助けられながら，自分でも手探りで操業形態を確立していった。



図10 工夫を重ねた小型底曳網

現在では私個人の年間総漁獲量のうち小型底曳網が9割を占めるようになり（図12），私の漁業生活の基盤となっている。

(5) 漁師生活の確立

地元の先輩漁業者を始め、県内の様々な先輩漁業者の方々から指導をしていただきながら、次第に小型底曳網漁業と刺網漁業のスタイルを確立していった。

東串良に移住してきた当初はもじゃこ漁の時期には種子島に渡って漁の手伝いをし、それ以外の時期は刺網を行っていたが、現在では基本的に7月～翌4月に志布志湾内の海域で小型底曳網を、志布志湾内での小型底曳網の操業禁止となる5、6月にマゴチ刺網を行っている（図11）。漁獲量・漁獲金額は最初の平成18年度は年度途中からということもあり5,174kg、2,328千円にとどまったが、小型底曳網漁業を本格的に始めた平成21年度以降は漁獲量・漁獲金額とも順調に増え、平成24年度はハモやマダイ、マゴチを中心に24,969kg、8,207千円程度となっている（図12、13）。

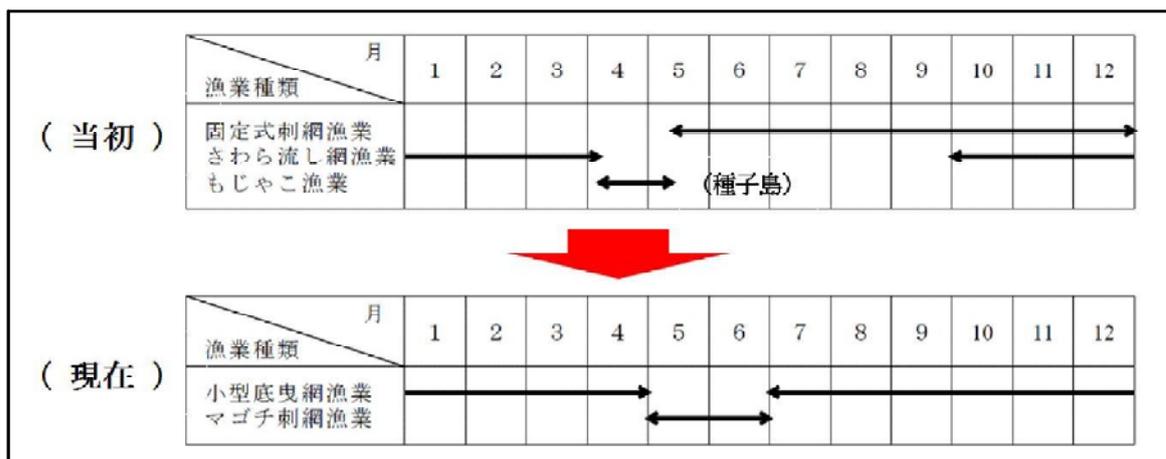


図11 年間操業スケジュールの変遷



図12 年度別漁獲量・漁獲金額

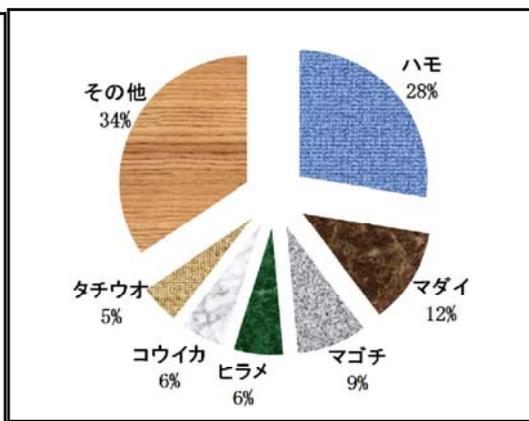


図13 H24年度魚種別漁獲金額割合

(6) 漁師塾での講演

またこのようにして漁師生活を確立していった経緯について、県から「ザ・漁師塾で講師をしてほしい」との依頼を受けるようになり、まだまだ若輩者ではあるけれど、私がかつて参加したザ・漁師塾にて平成20年からたびたび講演をさせてもらうようになった（図14）。



図14 ザ・漁師塾での講演

6. 波及効果（青壮年部長となって）

（1）漁協青壮年部長としての活動

東串良町へ移住して5年目となり、漁業者として落ち着いてきた平成23年度からは漁協青壮年部長に推薦され、就任することとなった。

青壮年部の活動として、毎年船主会との合同で先進地視察研修を実施している。今年度は他県の小型底曳網業者がいる漁協へ赴き、実際に漁協揚場にて漁具を見せてもらいながら意見交換を行った。特に志布志湾海域の業者には普及していない漁具等について詳しい話を聞くことができ、有意義な意見交換ができた（図15）。

その他青壮年部活動として、毎年地元小学生向けにヒラメの体験放流教室を実施している（図16）。また単発的ではあるけれど、地元の水産業の紹介ということで小学校での出前授業を実施したり、夏休みに中学生向けの釣り体験教室を行うなど、小中学生向けの漁業の普及啓発活動もコツコツと実施しているところである（図17）。



図15 視察先の漁業者との交流



図16 小学生のヒラメ放流体験



図17 中学生向けの釣り体験

（2）NPO法人と連携した地域活性化の取組

平成23年度には、NPO法人と連携したイベントも開催した。きっかけは、地元で「NPO法人豊栄ひっとべ会」を立ち上げて副代表として地域活性化に奮闘していた義姉との「お互い何かコラボできたらね」という世間話であった。この世間話を聞きつけた当時の水産業普及指導員から「ちょうど良い補助事業があるから、イベントをしてみないか」と話を持ちかけられ、県のかごしまのさかな「食」共生・協働事業を活用し、平成23年11月13日に東串良町の豊栄商店街を会場に「おさかな倶楽部」と銘打ってNPO法人豊栄ひっとべ会と合同で魚食普及イベントを実施した（図18, 19, 20）。



図18, 19 盛況だった「おさかな倶楽部」

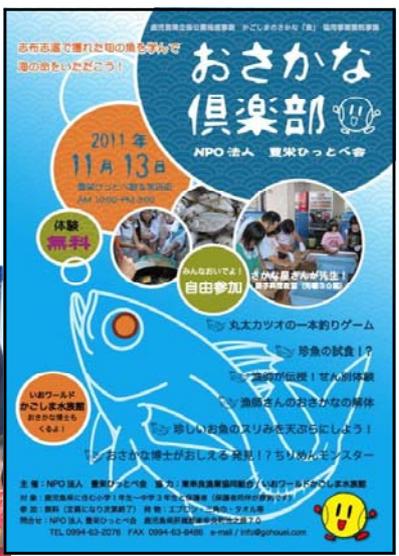


図20 おさかな倶楽部のチラシ

イベントではかごしま水族館の協力も得ながら、底曳網で漁獲される魚の選別体験や底曳網の廃棄魚を使った新料理の試食、親子料理教室、解体ショー、チリメンモンスターの選別体験、ミニ水族館等を実施した。当初は参加者50人程度を想定していたが、実際には300名ほどの参加もあり、イベントとしても大成功だったと思っている。

7. 今後の課題や計画と問題点

(1) 地域活性化に向けた取組

平成23年に実施したNPO法人との合同イベントは盛況となったものの、その後につながるような取組ができておらず、今後何か後に続く取組ができないかと考えているところである。特に東串良漁協はチリメンの一大産地であり、チリメンを活用した魚食普及の取組を実施できないかと思案しているところである。

また、今後も先進地視察研修を通じて地元漁業の活性化に取り組むとともに、地元小中学生など子供達向けのヒラメ放流体験や出前授業、釣り体験などの活動も継続していきたいと考えている。

(2) 若手漁業者との交流

種子島で漁師生活をスタートさせた私は、これまで南種子町漁協や東串良漁協の先輩漁業者はもちろん、県内各地の指導漁業士など様々な先輩漁業者に支えられ、漁業者として生活していけるようになった。

そんな私も最近では青壮年部長として近隣漁協の若手漁業者とも交流を深め、情報交換しながら漁を行ったりもしている。またザ・漁師塾での講師もさせてもらうようになったが、これまで私が様々な先輩漁業者に支えていただいたように、これから漁業者として頑張っていきたいと考えている若手漁業者や漁業就業希望者を、微力ながら応援していけるような存在になればと考えている。

(3) 今後の小さな野望

最近、小学生の長男をたまに漁に連れて行くようになった(図21)。すると息子は漁に行ったことを友人達にうれしそうに話をするそうで、現在長男の小学校では同じ学年の生徒10人中3人が「漁師になりたい。」と話をするようになったそうである。いずれは生徒全員に「漁師になりたい。」と思ってもらえるようになればと小さな野望を抱いている。

私にとって東串良町は新天地であるが、私の子供達にとってはまぎれもなく生まれ故郷であり、かけがえのないふるさとである。そんな子供達に、ふるさとである東串良町を誇りに思ってもらえるよう、今後も漁業者として頑張りながら東串良町の地域活性化に向けて邁進していきたいと思う。



図21 一緒に漁に出る長男の笑顔